

# 田中研新聞

第94号

2021年  
4月28日発行

甲南大学知能情報学部田中研究室 ほぼ毎月発行  
http://carnation.is.konan-u.ac.jp  
編集責任 田中雅博

## 永久凍土

大森 聖斗

# 日本人は新型コロナに苦しむ生活からいつどのようにして開放されるか

## ゼミ生と予想してみました

感染症の専門家からは、「次第に感染率が高まるが、同時に、弱毒化していき、最後は普通の風邪の一種になる」という予想がもつともうしく発表されたりしましたが、感染力は確かに変異種になって非常に高まったものの、弱毒化するどころか、重症化率も高まっているようで、ますます人類の脅威になってきています。昨今、死者数の増え方は第3波のときよりも少ないように見えますが、季節のせいかもしれません。

第4波では、多くの人が自粛生活に耐えきれず、街に繰り出し、どんちゃん騒ぎし、その場で感染するという、まったく知性のかけらも感じられないケースが増えています。

本学創始者である、平生 鈞三郎氏の有名な言葉に、「常に備えよ」というものがあります。コロナ禍に対して「常に備える」ために必要なことを考えると、それは、状況の予測が必要というところが見えてきます。つまり、予想しないと備えようもないということですね。

そこで、今回は、ゼミ生全員に、コロナ禍がどのように終焉を迎えるのか、予測してもらいました。ほとんどの人は、終焉というものが見えない状況を予測しています。それほどこれは深刻なのでしょう。その中で、大森君と石川さんは、物語風に将来の予測をしてくれました。

「え？まだコロナに罹っていないの？ウケるw古代人かよw」

二〇三〇年、東京オリンピックは数年前から開催されたもののパッシングの嵐で日本人のモチベーションは下がりに下がっている。経済は瀕死の状態、内需は下がる一方で輸出企業は電気自動車製造の事情により外貨を稼げずにいる。街は一見活気があるように見える。

人々はすでにマスクの着用が必要でないことを理解し、代わりに首から見慣れたぬものをぶら下げている。政府からひとりあたり一台支給された”感染症陰性デジタル証明書”通称デジシロである。

感染症に罹っていない、もしくは罹ったとしても治療した、ワクチンを規定回数射つた等理由は様々であるが、これがあることで疑心暗鬼を生まず『ソーシャルディスタンシング』は遠い過去の遺物となった。

まあ、クロがシロにするために偽造などする事件はときどきニュースになっているが平和な世の中が訪れていた。

地球温暖化はとどまるところを知らず、海水温は上がり続けている。

ネットニュースのニアナウンサーはそのことを告げながら、生きた人間と変わ

らず真顔と笑顔を使い分けられている。『不気味の谷』をすっかり超えた存在として受け入れられて数年。「・・・では最後のニュースです。・・・南米で感染症と見られる症状により日本人一名が重体。・・・未だ原因はわかっていません。・・・」

それでは各地域ごとの10分ごとの天気予報をどうぞ。・・・」

二〇一九年に発生したと思われる新型コロナウィルスは二〇二〇年〜二〇二一年にかけて病院、病床を圧迫し医師看護師ともに疲弊の日々であった。コロナ以外の感染症や疾病で患者を診ることができず病院経営をずたずたにし、増やさねばならない病床がより一層減少していくという悪循環を生んだ。政府は医療に介入することで医療従事者の給与が上がる等多少のよい影響があったものの、やはりどこかずれていて誰もりが納得する”大岡裁き”つまり三方一両損のような顛末は期待できなかつた。

飲食店や小さな個人商店にはじまり零細企業中小企業はそんな煽りをもろに喰らい軒並み消えた。まるでゲバルトのように傷を負って消えたのだ。ただ新たに始める者も多数いた。ある者は家庭が経済的に苦しくなり辞めた大学の近くで商

売を始め、あるふらふらしていた者がチャンス到来とばかりに新たなビジネスを始めた。

南米を訪れ今日午前帰邦したこの男もそのうちのひとりである。彼は降り立った関西国際空港の空気を胸いっぱい吸って、それから小さな唸り声とともに吐き、長時間のフライトに疲れた脚をわざと大きく動かすように歩き出し1階到着ロビーを出た。

数日後、眠りから覚めた彼は異変を感じた。熱があるようで体が怠い。まだ熱が上がるのか悪寒もする。

南米で世話になった友人に帰国の連絡をしたが返事がなく、別の現地の友人に連絡しようかと思っていたところの急な自覚症状だった。

「風邪かな。・・・病院行く。」と自分に言い聞かせようように軽く言ったものの、感染症に対してセンチタイプすぎる世の中である。ひとたび何かしらの感染症患者と周りに知られたら：想像に堪えない。

彼の覚悟を決めて首からデジシロを掛け、外に出ることにした。まだ彼のデジシロにはシロマーク(感染症に罹っていない証明)が表示されている。なので周りの人は気づくわけもなく通行人に紛れてみたのだ。しかしそうしてみたものの罪悪感で押しつぶされそうになりながら病院へと足早に歩く。

その時すれ違いざまひとりの女性が彼の顔をじっと見つめてくる。

突き刺さる視線に気づき彼は思わず目を逸らした。「この人！病気でず二」金切り声に体中の毛が逆立つような感覚を覚えて彼は慌てる。

『なぜだ、なぜだ？』体が怠くて逃げようにも走ることができず、彼はただ足早に〜といつても周りから見れば普通で〜病院に向かおうとする。だが周囲から半径3メートルは容赦なく距離を取られウエアブル端末のカメラ部分をこちらに向けられる。SNSに投稿されてしまえば瞬く間にパッシングの的となり感染症なのを外出したと非難されるのは目に見えている。

彼はまだなぜ知られてしまったのかわからないまま服を顔まで引つ張り上げて隠すようにして重い体を引きずって逃げ出した。女性はその顔を見て病気がたと悟ったのだ。つまり顔に何かしらの症状が出ているのだらう。

鏡を渡され顔を見ると赤いぶつぶつができていた。気づかなかつたが腹にもできていた。

「水疱瘡ですか？本当に？」

「そうですね。あなた渡航前に予防接種しなかったでしょう？駄目ですよ。こんなご時世だし感染症対策はちゃんとしないと。」

あ、それからそれからと付け加えこれから高熱が出て苦しむので栄養の摂れるものを用意するようにとQRコードを渡された。

「これ読み取って読んでね。次の診察のタイミングとか色々書いてあるから。はいお大事に。」と首から掛けた彼のデジシロに”水疱瘡(症状軽度)”と登録しながら医師は言った。

現地の友人も水疱瘡だったと、生死の境を彷徨ったと、如何に熱に浮かされ大変な思いをしたかと懇切丁寧に書かれたメッセージを数日後受け取った。

新たな感染症ではなくて皆が安堵した。しかし彼は通行人にばれて叫ばれた時のことを思い出して暗い気持ちになった。これからも人々は感染症に対して過剰な恐れをいだき、罹った者を糾弾し煽られるがままに叩く。

「水疱瘡ですね。抗生物質出しとくんで。」

人つ子ひとりもない病院の待合室で心臓が押しつぶされそうになりながら受付ロボットに病状を説明して、少し待ち通された内科の医師に開口一番そう言わ

れないスキですら幽霊に見えてくるのだ。目に見えない感染症の原因となるウイルス、細菌も同じようなものだ。わからないから恐れる。恐れるからもつと正体が見えなくなる。

正しく知り、そして恐れるべきものが何なのかというのをバイアスなしに考えることで恐れを克服することはできる。

永久凍土をご存知だろうか。ずっと凍ってきた土地だ。ウイルスがそこに凍りついたまま眠っている可能性がある。このまま地球温暖化が続き海水温が上がり水が溶ける、つまり今までずっと凍ったままの地から目覚めようとしているウイルスがあるというのだ。そしてそれは人類が出会ったことのない未知のウイルスだ。

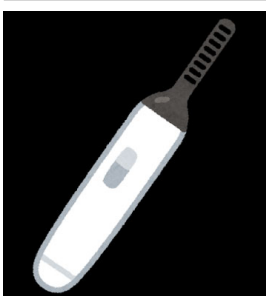
それが目覚める時はそう遠くない。

人類が本当の意味で感染症から解放される時というのは、誰しもがもう手遅れであることに気づいた時、かもしれない。

「風邪かな。・・・病院行く。」と自分に言い聞かせようように軽く言ったものの、感染症に対してセンチタイプすぎる世の中である。ひとたび何かしらの感染症患者と周りに知られたら：想像に堪えない。

「水疱瘡ですね。抗生物質出しとくんで。」

人つ子ひとりもない病院の待合室で心臓が押しつぶされそうになりながら受付ロボットに病状を説明して、少し待ち通された内科の医師に開口一番そう言わ



「水疱瘡ですね。抗生物質出しとくんで。」

人つ子ひとりもない病院の待合室で心臓が押しつぶされそうになりながら受付ロボットに病状を説明して、少し待ち通された内科の医師に開口一番そう言わ

「水疱瘡ですね。抗生物質出しとくんで。」

人つ子ひとりもない病院の待合室で心臓が押しつぶされそうになりながら受付ロボットに病状を説明して、少し待ち通された内科の医師に開口一番そう言わ

「水疱瘡ですね。抗生物質出しとくんで。」

人つ子ひとりもない病院の待合室で心臓が押しつぶされそうになりながら受付ロボットに病状を説明して、少し待ち通された内科の医師に開口一番そう言わ

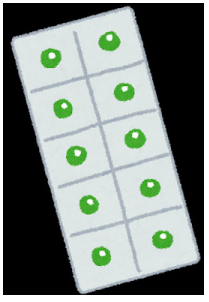
# 石川 采璃小

「お前が女だったら乗せられるのよ。」  
 なんの脈絡もなく、向かいに座る親友の大作は続けた。

「頭もいい。顔もいい。稼ぎもそこそこ。こんないい物件は他にないんだけど。男なんだよなあ。」  
 右頬を2人席のテーブルに付け、左手でビールのグラスを軽く握る彼はもうすでに出来上がっている。  
 「それはお前もだろ。それに、名前だけでいうなら、お前の方が女っぽいよ。」  
 僕の真実という下の名前と、彼の蘭という下の名前を頭に浮かべ、僕はそう告げた。

時短営業中にもかかわらず、高架下の小さな居酒屋は彼のように出来上がった人の笑い声で埋め尽くされている。  
 僕たちが座る席はちょうど、壁に平行に設置されており、僕も左肩を壁にくっつけて座っている。右には人1人通れる通路を挟んで、カウンター席があり、店員同士の注文のやり取りもよく聞こえる。  
 彼のビールグラスの汗が1つ2つと流れ落ち、テーブルとの接着面に貯まり、結露のコースターを作る。「俺もホーム画面を彼女とのツーショットにしてえ。」  
 そう言うと、彼はテーブルに突っ伏して静かになっ

僕は手元の焼酎のグラスをあおり、空になったグラスと、テーブルにできた水の円もどきをじっと見つめた。ちょうど右の通路を通りがかった店員さんに、僕は飲んでいたものと同じものを追加で頼んだ。彼が起きるまでもう1杯分くらいはかかる僕が知っていたからだ。  
 目の前で寝ている大作蘭は大学の同級生だ。彼とは赤レンガで有名な大学の神学部で知り合った。人数の少ない学部であること、自宅の最寄りの駅が近いこともあり、彼とは大学生活の多くの時間を共に過ごした。就職先はどちらも違っていたため、卒業後は疎遠になるかと思いきや、共に実家から通勤できる会社に就職したため、卒業後もこうやって、毎月第2土曜に飲みに行く仲である。



スマホ越しに告げられたのは大作の死。隔離先のホテルで容態が急変して亡くなったそうだ。ご時世柄お別れ会を行わらぬ。詳しいことはまた追って連絡が切れた。  
 僕はホテルで隔離生活を送っていたことも、ましてや彼が感染していたことを知らなかったのは、ただ心配させたくなかったのか、彼のプライドがそうさせたのかは分からない。  
 僕はじつと、数秒ホーム画面を見つめた。アプリのアイコンの後ろには、どこか分からない景色が映っている。スマホをテーブルにおき、眼鏡をかけた、そのままペランダにて、白と蒼が半々に混ざる空を見上げた。

それから数年後、新型にも変異型にも効果がある特効薬が開発された。その薬の名前は「ノアズアーク」。奇しくも、その薬の接種が始まった日は二月十七日だった。  
 そんなに頻繁に僕と飲みに行っていたのは、いいひとなんてできないよ。ましてや入社式もオンラインだった僕は、会社の歓迎会・親睦会での出会いに期待できないのだから。氷の角が丸くなったグラスを回しながら、あと数分で起きるのであるう彼に念を送ってやった。  
 それから3週間後の日曜日、僕はスマホの着信音で目覚めた。相手は先月飲みに行った大作からだ。た。「寝皿さんの携帯で間違いないですか。」  
 通話を開始するとスマホから聞こえたのは、女性の声に違ふことが判明した。その声の主は大作の母親だった。

数百人新規感染者出ても居酒屋の前にいっぱい酔っ払い人が楽しんでるのを見た時、その無責任感にかなり不快でしたが、彼らも阻止できません。  
 一方、最初感染拡大した武漢市が今ほぼ安全になるのは国の制度の違いですが、他にも我々学びべき点もあると思います。その中では一番重要なことはプラスエネルギーの意識です。実例としてですが、私の故郷である撫順市は歴史的には1人だけコロナに感染されたとしても、この間みんなかなり危機感を持っていました。母から聞くとバス内にマスクしていない人がいたら、みんなに責められて早く降りろって言われるのはみんな当然だと思えます。もちろんあの人と接触した人は全部隔離され、行動路線と個人情報も誰でも知られます。これが我々日本人は受け入れられないことだと思えます。一体、我々日本はどうしましょうか？  
 まず国難の瀬戸際に社会にマイナスイネンギーをもたらす人に必要な処罰、罰金などの措置が必要だと思えます。そうしないと何年後、何年後コロナが絶滅するかもしれないが、いつ終わるか分かりません。少し考え方を転換します。仮にどうしても解決できなければ、自分を心から解放しましょう。コロナに苦しめられる心より、むしろ無視して楽観主義にしましょう。ですが、一体どの選択肢が正しいのかは人の世界観によるものです。どの選択肢も選べずには誰でらして日を過ごすのは誰でも希望としていないだけで、我が国は衰退してしまっています。ですので、我々自身で身を潔くしたうえで他人に感化しましょう。国家興亡、匹夫有責！

## 張 伯聞

新型コロナ禍はもうすぐ1年半になります。私たちの日常生活から社会発展まで嚴重に侵蝕されています。コロナ問題を徹底的に解決するには都市封鎖と全員ワクチン接種の手段があります。が、なかなか実現するのが、なかなか実現するのが、難しい現状を否定できません。一方、全員は飲み会に行かない、感染されたら自発的に報告するなどの暗黙のルールに守れば1年以内にウイルスは自滅すると思えますが、これもなかなか実現できません。市に毎日

## 荻野 敦史

新型コロナウィルスが猛威を振るい始めて1年以上が経ちました。  
 このウィルスは潜伏期間が長く、若者の多くは軽症や無症状が多い中で、重症化患者への医療対応は看護師が何人も必要なレベルになり、医療崩壊へ繋がってしまふことから、私たちは感染防止対策を徹底してきました。  
 その中で、このコロナ禍の苦しみというのは、多くの人にとつてはコロナ自体に閉居することよりも、経済や飲食店などの休業、人との関わり方の減少など、感染対策の副作用に関することが多いのではないかと思っています。

## 岸 篤

結論から言うと開放されない。ニュースでも取り上げられている、医療従事者に対する誹謗中傷や、感染者やその親族に対する風評被害やダメージが消えることはないからである。  
 万が一、変異種に対するワクチン等も普及し根絶されたとしても、コロナ禍の間医療従事者や感染者の家族が受けた疲労や不満、世間に対する憎しみが消えることは余程の事がない限り、あり得ない。  
 現状でも医療従事者の退職のニュースが散見される。これらの対策を今からでもしなければ、一時的な医療崩壊では済まないかもしれない。

## 大野 皓平

ワクチンは通常であれば、開発に何年もかかってしまうことが現状であり、また新たな感染症が流行すれば、現在行っている感染症対策を行わなければなりません。  
 今までの社会は感染症への対策や意識が低く、コロナ前までの生活様式や、大阪や東京など一つのエリアに人が集中するような状況や空調、換気環境が感染症に對してとても弱く脆いことが、感染拡大の要因の一つでもあります。  
 今回のように有事の際に、慌てて対応するような対策ではなく、このような感染症に對する対策のシステマや環境づくりと法整備を行い、より感染症に強い新たな社会や生活方法に変化し、それに対応していくことが今後の感染症との付き合い方として重要だと思えます。

## 濱石 海地

新型コロナに苦しむ生活から人類が解放される時は、万能ワクチンが開発される時であると思はれます。  
 新型コロナがもたらしている苦しみは大きく2つ。ウイルスそのものがもたらす健康被害と、感染拡大防止措置によるものである。  
 現在流行している新型コロナに限って言えば、通常のワクチンが接種によって感染を食い止めることが可能である。しかしこれが収束したとしても、将来、類似の感染経路を持つ新しい病原体が発生するはずである。そうなれば感染拡大防止措置という苦しみが再来する。  
 これを根本的に解決する方法は、新型コロナが収束した後も防止措置を続けるか、万能ワクチンを開発するか、どちらかである。当然万能ワクチンは存在するはずがないので、現実的に考えるならば、あらゆる病原体に對する迅速なワクチン開発・生産を可能とするシステムを構築することが「万能ワクチンの開発」である。

## 岸 春樹

今また緊急事態宣言が出た中で大型店舗やカラオケ設備の店舗の休業要請を出したことで若者からの拡大は一旦多少なり減るのではないかと。  
 しかし車など足を持っていない若者は隣県等のまだ宣言が出ていない場所に集まるなど大都市付近が少し増えたり、危機感の少ない人は出歩く為、実際また増減が波になってまだ当分は静まらないのではと思う。  
 感染を防ぐことがとても重要であるけれど、ワクチン等の普及を急ぐ必要があると思う。

## 寅巴里アーデル

私は日本人全体という見方をすれば新型コロナに苦しむ生活から人々が解放されるのは、まだ長い道のりがあると思っております。日本国内だけでも、もうすでに、コロナ禍という現状に對しての考え方の相違が発生してしまっているためです。  
 昨年コロナが流行り出し、初めて緊急事態宣言が発令された時には老若男女、多くの人がコロナを警戒をし、コロナをシャットアウトするために動き、その生活に苦しみながらも耐えていたと思えます。  
 しかしながら現在、3回目の緊急事態宣言が出ている中、周りの人々やニュースなどを見ていると多くの人々がコロナ禍ということに関係なく外出をしていたり、密な行動をしている人が多く見受けられております。  
 私はそう言った人々には「や、新型コロナに苦しむ生活」はしていないのではないかと思っております。しかしながらそう言った人が増えた結果よりコロナの収束は遅くなるでしょうし、本当にかかりたいと思わない、かかったら危ない人々はより一層自衛を強いられて、苦しい生活を長期的に送らされることになっていくと思えます。また、そうやって一度ハメを外してしまつていく人々にもう一度自衛を促すことはとても難しいと思えます。  
 また、ワクチンや薬などの開発も日本はとても遅れており、輸入なども間に合っていないためそう言ったものを頼る上でのコロナ収束はとも遅くなると思っております。そのため、「日本人」がコロナに苦しむ生活から解放されるのは、まだまだ先のことになると思はれます。

藤川 敬太

現在の日本では3回目の緊急事態宣言が発令されているが過去2回の結果を見ている限り大きな効果は見込めない。外出を控えてもらい、コロナ感染者を減らすとしており、政府も、終息させるにはまだ時間が必要だと考えていると思

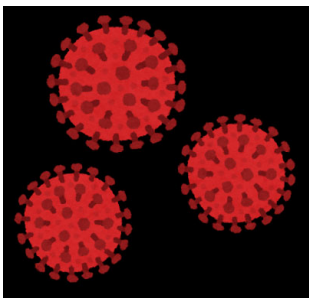
人類の転機になるだろう

田中 雅博

新型コロナウイルスは、人類が夢見る、個人の自由と資本主義・自由経済を直撃した。新型コロナウイルスに罹って、何が問題なのか、その点から順に掘り起こしておこう。

1. 罹って何が問題なのか

一部の人は、無症状のまま陰性に戻る。本人は気づいていない場合が多いだろう。多くの人は、風邪症状となり、発熱、咳、倦怠感、頭痛、のどの痛み、関節痛



1. 罹って何が問題なのか
一部の人は、無症状のまま陰性に戻る。本人は気づいていない場合が多いだろう。多くの人は、風邪症状となり、発熱、咳、倦怠感、頭痛、のどの痛み、関節痛

ようか。

横田 大地

一般市民目線としてコロナ禍の苦しみから解放されるのは、今の状態に慣れたときだと思います。

思い返せば蔓延が始まった2020年はもっと緊迫しており、外出する人は少なく、マスクやことあることとの消毒は面倒臭かったように思います。ところが今では良くも悪くもそれらへの抵抗もなくなりまし

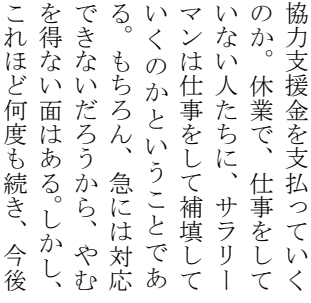
街中で人の通りは増え、規制をかけても夜に飲み歩いている人もいます。言い方を変えれば他人事としてそんなに深刻に考えなくなったということ



もうか。
もちろん本当に苦しんでいる人たちが国という視点からではそんな状況は看過できないでしょう。

医療、経済や雇用、国交などは特に深刻です。仮に今日明日新型コロナウイルスが消滅してもその爪痕は長期に渡って残り続けるでしょう。

下手をすればコロナ禍が解消される前に国が破綻しているかもしれない。
この数に収まっているのは、国民が多様な犠牲を払ったうえで実現しているというのをまかさか忘れて



政府は日本の民主主義を主張するのであれば、今後どこに支援をするのか、民意を問わなければならぬ。緊急事態宣言のたびに協力支援金を支払っていくのか。休業で、仕事をしない人たちに、サラリーマンは仕事を補填して

これらのは点はコロナのもたらした利点として、大いに期待できるのではないだろうか。

6. 日本という国の姿を直視し、いつまでも豊かな国という幻想は捨てる
ここで、真正面から日本という我々の住む国を直視することが必要だ

7. 将来のことは若い世代で考えるしかない
今回の、様々な政治的な問題点が露呈した。それは大きな問題だ

2. インフルエンザ程度の死者数だから無視してよいという主張について
新型コロナウイルスによる死者は日本全体で、1万人程度。これはインフルエンザと同レベルだから、大騒ぎせず、普通に生活すればよいという意見が時々見られる

3. 病気が短期・中期の現象、お金の問題は長期
病気自体は、個人個人の体にかかることであるが、問題はそれだけではない

おそろしく今回もそれと同じような形、あるいは別の形をとるかもしれないが、さらに大規模な増税が行われる一方で、福祉や年金の削減という形で、必要な人や世代に支払われる予定

5. 医療崩壊は他人事か
確かに、たとえ罹ってもほとんど無傷で済む若い人が大勢いることに間違いはない

8. コロナはいつどうやって終焉を迎えるのか？
今までの経過を知っている、終焉はないと思っ

8. コロナはいつどうやって終焉を迎えるのか？
今までの経過を知っている、終焉はないと思っ

8. コロナはいつどうやって終焉を迎えるのか？
今までの経過を知っている、終焉はないと思っ

編集後記

コロナは人類数百年に一度レベルの災害でしょう。この際、皆さんが考えていることを文字にしておきたい

対外予定

5月26日(水)〜28日(金) システム制御情報学会研究講演会(SCI21)(オンライン)に、参加予定(張、荻野、岸、田中)



私の予想は、あと半年くらい後に、さらに感染力の強い変異株が生まれ、それが毒性が弱くて普通の風邪になって、終わる。はて真偽のほどはいかに？